

アテナイ都市システムの創始者？ テセウス

渡 辺 浩

A：先生こんにちは。寒い日が続いています。今日から列伝もいよいよ本論に入るのですか？

Q：そう、最初に英雄伝説の時代から2人ばかり取り上げたいと思うのだが、その1人がこのテセウスだ。なにしろ古い話でね。あの有名な怪力英雄ヘラクレスがまだ生きていた時代で、トロイ戦争に参加した英雄たちの一世代前に位置づけられる。

紀元1世紀の有名な対比列伝の著者プルタルコスも、ローマの諸英雄を取り扱って建国者ロムルスにさかのぼったとき、そのギリシャ側の対抗者として、いくらかちゅうちょしながら引っぱり出したのがこのテセウスだ。数百年の伝承を経た後で、古典時代には積極的に文学的創作の素材に取り上げられた人物だから、それらの衣をはぎ取って歴史的に真実に近い姿を探ることは事実上不可能だが、われわれは歴史の専門家ではないのだから、こういう人物を取り上げることも許されるだろう。

伝説は生誕因縁話からはじまる。古王国時代のアテナイの王アイゲウスは、子供がないのを苦にしてデルポイにゆき、アポロンの神託をうかがった。そして意味不明の神託をもらい、帰路トロイゼンに立寄って、王ピッテウスの客となった。ピッテウスは神託を聞いて、ひそかにその意味をさと、娘アイトラを客に提供したのだという。

さてテセウスには4つの顔がある。第1は武勇の若者として、母のもとで育てられ成人したとき、父アイゲウスが残して去った剣をもって、アテナイへと出発する。海路を取れば安全だが、コリント地峡を経由する街道筋には悪者がばっこして、危険だった。

すでにとどろいていたヘラクレスの高名に匹敵する名誉心に燃える彼は、あえて陸路を選び、途中の悪漢を片端から掃蕩する。いわく、エビダウロスの棒男ペリベテース、コリントの松曲げ男シニス、クロミュオンの勇猛な牝猪ファイア、メガラ領海岸の足洗い男スケイロン、エレウシスの相撲男ケルキュオン、ベッドの男ダマステース、と続くのだが、これらは皆独特の方法で通行人に難題を課して殺害していたもので、テセウスはそ

れと同じことを彼らに強制して殺したという。旅人の身長をベッドに合わせるよう強制したダマステースの話は時々引用されるね。

A：どうも相当の百鬼夜行ぶりですね。しかしあまりスケールの大きい怪物は登場しませんね。

Q：いいところに気がついた。今話はたしかに中期英雄伝説の雰囲気伝えてはいるが、若干2番煎じの感がなくもない。天を摩する巨蛇とか、ヘラクレスの退治したヒュドラのような怪物はあらわれない。ヘラクレスはドーリス人の英雄なので、イオニア人が対抗上こしらえ上げた自分たちの英雄がテセウスだという説もある。

こうしてアテナイに着いたテセウスは、妨害を排してアイゲウスの眼前に剣を示して認知を得、妨害に回った魔女メディアは追放される。

テセウスの第2の顔は有名なミノタウロスの退治者としてのそれだ。おとぎばなしのほうでゆくと、アテナイがかつてクレタのミノス王と戦ったときの講和条約によって、クノッソスの迷宮内に閉じこめられている牛頭人身の怪物ミノタウロスへの人身御供として、アテナイから送られる少年少女の中にテセウスは志願して加わり、テセウスに一目惚れしたミノス王の娘アリアドネの助言によって、糸玉を手にも迷宮に進入し、ミノタウロスを殺して脱出し、アリアドネを伴ってナクソス島に到着した。今世紀初頭 A. Evans によって発掘されたクノッソスの宮殿は、まさに迷路宮殿と呼ぶにふさわしい複雑な構造をもっている。

A：ははあ、わかりました。テセウスはグラフ理論の開祖だというわけですね。

Q：いや、そんな見えすいたこじつけをしなくても、ギリシャの人材は十分に豊富だといっておこう。もし迷路に主眼を置くなら、迷宮の設計者ダイダロスを取り上げるところだね。むしろこの話の興味は、伝説と考古学との接点にならないかという点だ。ミノス王はトゥキュディデースによれば、エーゲ海域での最初の海軍の建設者だった。彼はクレタ文明最盛期の末期を代表する人物のように思える。この事件が前回話した考古学的に確認

されるクノッソス宮殿の破壊の何回目かの時点と一致しないだろうか？ それによってテセウスの時代、さらにはトロイ戦争の年代推定の手がかりが得られないだろうか？

A：おもしろそうですね。伝説年代確定のORですか？

Q：ただ、今までのところこの試みは成功していないようだ。中国の戦国時代についても、年代確定について残っている問題があるようだね。

さてテセウスはアリアドネをナクソスに残してアテナイに帰還する。なぜそうなったかについては、いろいろな文学作品やオペラの素材になっているので、そちらを参照してもらおうとしよう。船に無事帰還の合図の白帆を掲げることを忘れたために、王アイゲウスは絶望して死に、テセウスは王になったという。

アテナイの王としてのテセウスがその第3の顔だが、彼は依然として個人的武勇を誇る若者として、いろいろな冒険の場に登場したらしくも見える。

しかしここではむしろそれと反対の話に注目したい。王位につくこと彼は法律の守護者であることが明らかになったというのだ。アテナイの悲劇作家ソポクレスの“コロノスのオイディプス”はその作品の中でも最高の傑作だと思うのだが、そこに登場する老王テセウスは、自分の王位、統治能力、人民の自分に寄せる信頼に完全な自信をもち、隣国の王位を捨てた老人、名誉心に燃える若い英雄たちや娘たちの訴えをすべてききわけ、その心情も理解したうえで、威厳ある調停者の役割を勤めることのできる人物だ。

この顔で彼はたとえばショーサーの「カンタベリー物語」などにも登場する。エウリビデスの“救いを求める女たち”では彼はやや単純ではあるが、いずれにせよ、近隣諸国にまで信望のある王として、“テーバイ攻めの七将”に関する紛争について、テーバイとアルゴスとの間に立ってなんらかの調停の役割を演じたのだろう。

さてテセウスの第4の顔は、まさにそれによって彼をここに登場させたのだが、彼はアテナイの都市国家システムの創始者だという。それまでのアテナイ王国はアッティカ地方に散在する独立諸氏族の連合体で、おのおの自治組織をもち、相互間で争うことも多く、王に反抗する者もあったが、テセウスは諸氏族を説きつけて都市アテナイを建設し、女神アテナイを勧請して汎アテナイア

祭を創始し、各村落ごとの協議機関を全廃してアテナイのものを唯一の中央協議機関と認めさせ、それによって単一政体に統合し、さらに自分の王権は軍の指揮と法律の守護に限定して、他の点では民主政体を導入したという。

A：とても信じ難いですね。これが今までの3つの話と同時代の話とはですね。

Q：さすが気づいたね。実はこの話は前6世紀末のアテナイの「民主派」の指導者クレイステネスが、自分の政治目的に合わせて創作した話だとの説もある。しかし歴史時代のアテナイの民主政体がいつごろからはじまったかについては、この他に手がかりになる伝承は見当たらないようだ。

ある人はホメーロスがイリアスの中のトロイ戦争に出陣する軍船表の中で、アテナイ人だけをデーモスと呼んでいることをもって、上の話の証拠とする。これに対してホメーロスの叙事詩は前6世紀にアテナイで集成されて現在の姿になったのだからという反論、他方その集成はクレイステネスに先だつ僭主ペイシストラトスの時代だったという再反論も成立しそうだね。

しかし50歳をすぎた彼にまだ武勇の若者の血が騒いでいた。盟友ペイリトウスと2人でスパルタにゆき、後にトロイ戦争の原因となるまだ12歳の美少女ヘレネを誘拐し、他方友のために別の冒険にでかけたが、その留守の間にスパルタの双生児二将がヘレネを求めてアテナイに侵入し、また民衆の煽動にたけ大衆に媚びる言論に投じた最初の人といわれるメネステウスが二将と手を結んでいた。

テセウスが帰国したとき、民衆についてもはなはだしき墮落が見られ、命令されたことを黙って行なうよりも機嫌を取られることを喜んで彼の敵に回っていた、というのだが、これなどは前6世紀のアテナイの政情を諷した表現かもしれない。失意の彼はアテナイ人に呪いをかけ、スキュロス島に渡って王リュコメデスに頼ったがそこで死んだ、または殺されたという。

後年メネステウスはアテナイ勢を率いてトロイ戦争に参加して死に、別に戦士として出陣したテセウスの子が、帰国後アテナイの支配者になった。しかしアテナイ人がテセウスを半神として、祭日を設けて尊崇するようになったのは、ずっと後世になってからだという。

(わたなべ・ひろし 筑波大学社会工学系)

フォーラム